勉強会　福祉と自由　第３回
第一部　労働　第３回　「感情交換論」　　2008 年 9 月 26 日

１）前回のまとめと新しいテーマ

労働の編成ということ

前回のまとめを簡単にします。労働の意味とか意義はどこにあるのかということから勉強会をはじめました。前回までにいくつかの労働論に当たりますと、まず異口同音に、働くことそのものにではなく、協業を組んで働く中で、自分が社会的な意味で対他存在であるということを確認することに、労働の喜びも悲しみもある。労働論がこのように言っているということです。前回の勉強会で、「労働の編成」という言葉を使いました。これはつまり、労働において私が社会的対他存在であることの中身を、現実的に意味します。どのような労働市場が作られているか、あるいはどのような労働組合があるかというようなことが具体例となります。ここで改めて労働の編成ということを言う理由は、普通、近代資本主義社会における市場では、経済学的にいうと、労働の編成を決める理論的な根拠がないということになっているわけですね。アダム・スミスを継承する新古典派経済学では、利己的かつ合理的に自己決定できる個人が社会を構成していますから、これが労働の中でどのような集団を作るかということはそこからは問いえない形になっています。実はマルクスの資本論を純化して捉える経済学でも同じことです。ここでは、労働力すら資本主義社会では商品化されているところにポイントがあるわけですね。労働力は商品ですから、これは自動車だとかペットボトルだとかと同じように、市場で売買される。で、市場の売買の法則にのっとってその価格も決まるということになりますから、ちょうど自動車の組織なんてことが問いえないと同様に、労働力商品の編成などということも問いえないわけです。それが両方の経済学が言っていることであって、したがって近代の市場社会では個人は孤人である、という一般的な話になるわけです。

そうすると、労働の意義は人と一緒に労働することだという、その人と一緒という契機がそもそも市場社会にはないことになります。ところが現実に考えると、近代資本主義社会のごく初期から労働者は労働者の組織を持って、労働力商品の売買をしていることが現実にあるわけですね。これはどこの社会でも、どの国でも、どの時代でも同じです。労働組合などはその典型的なもので、労働力商品を労働者のイニシアチブで販売する独占組織をかなり初期から作っていました。それからブルジョワ的な編成からいいますと、労働組合よりずっと前に、ワーキングプアの救済組織の長い歴史があるわけです。この二つのこと、ブルジョワ側の労働の編成と、労働者側からの労働の編成というのが、第二次大戦後

に福祉国家を形成して今日につながってくるということです。

前回の勉強会で、労働の原像の 2 として取り上げたとき、次にことを指摘しました。現実の労働の編成の在り方、つまり市場社会における労働の在り方と、本来の労働とを対比して、その両者を自己疎外論という論理でつなぐというのが、マルクスの労働論の一つだった。この自己疎外論という論理は別に労働だけではなくて、これから取り上げる「感情」に関してもしぶとく使える論理ですので、そのための演習にもなると思ったので労働の自己疎外論に寄り道したわけです。

そして前回の結論として指摘したことです。私の考えでは、労働の意義があるとかないとかの議論は、一方では、本来労働とはこういう意義のあるものなんだという議論、疎外されない労働論ですね。こちらの方向で議論しても有効にはならない。逆に、労働は現実には疎外されているのだから、労働の時間の外で、労働の喜びを見出そうという労働の外部意義論。これも今はやっているけれども、こちらの方向も好ましくない。だとすると、現実の市場社会で、わが国では労働がどのような編成の仕方をしているのか、労働組合がどのような地位にあるのか、福祉国家がどのような地位にあるのか。あるいは現在、それらがどのように解体しているのか。解体しているのなら、それを望むべき方向に再生、再編していく。労働の意義とは現実の労働の編成の在り方の中で問うべきであるというのが、暫定的な結論でした。これは何も今のワーキングプアの人たちに、労働組合を結成して階級闘争をやれというふうには直接つながらない話ですけれども、現在の労働論を見る視点の一つになると、私は思います。

新しいテーマへ

さて、労働の原イメージを訪ねる話と現在の労働の情況と、行ったり来たりする話は一応ここで終わりまして、新しいテーマへ行きたいと思います。そのときに念頭においているのは、三つぐらいのことです。一つは、現在介護労働に関連して、これを感情労働としてとらえることが一般的になっています。私は必ずしもいいことだとは思っていませんが、それはともかくとして、介護労働は感情労働だと言われています。何を意味しているかというと、先ほど労働力の商品化ということが出ました。労働力の商品化のもともとのイメージはやはり身体労働。ところが、サービス産業が盛んになってきますと人間の感情が商品化される。具体的にいいますと、資本によって感情の規則が定められ強制されることと、それを受けて労働者の側では自己の感情のガバナンスをすることが陰に陽に迫られる。この資本と労働者の合作として感情労働の現状をみるという、こういう考え方です。そのバックには当然、感情というものについて、特に労働の編成の場における感情というものについての、どのように把握するかという問題があります。

それから二番目は、本当の私とか、本当の感情とか、本来の私とかですね。それから、

本当の自己を実現するとか、こういうことが今の流行のテーマになっています。このことを感情の自己疎外論の論理の枠組みで見ていくことができるだろう、という見通しが頭にあります。ここに感情交換論が、現実的な接点が持ちうるのではないかということです。

それから、三番目ですね。先ほど来、市場社会の労働の編成ということを言いました。市場社会の労働の編成とは、言い換えれば市場社会は何を軸にして「社会」となりえているのかという問題です。利己的で自由に振舞う個人から社会が成り立っているとすると、その社会の絆は何なのかが当然問われなければいけないわけで、この問題に「感情交換」というところからアプローチしてみよう。経済学的な意味での労働力商品の編成のあり方、それには感情規則の形成が関係してくるだろうと予想します。今回のテーマの一番最後に「応用問題」として、介護労働の職場で、介護労働をどうとらえるかについて考えます。いずれはみなさんが、介護職場を例題にして労働のあるべき編成論を組み立てていただきたいという期待があります。

２）アダム・スミス『道徳感情論』（1759 年）

さて、アダム・スミスの道徳感情論に入りたいと思います。アダム・スミスと言いますと、国富論が有名で、古典派経済学の開祖で、それが新古典派の経済学となって現在の近代経済学の主流を形成しているわけですから、近代経済学の元祖として有名です。先ほど市場には労働を編成する原理がないといいましたが、この手の理論の大本にある人として位置づけられています。けれども、これとは随分趣の違うことが、この道徳感情論では取り上げられている。労働への関心からはこちらの方がよっぽど国富論より面白いです。あまり世間では読まれていないようですけれども、これを読みたいということですね。

「感情交換論」というふうに、アダム・スミス自身が言っているわけではありません。私の造語です。スミスが取り上げるのはただの感情ではなくて道徳感情です。これはあらかじめ了解していて欲しいですけれども、痛い、痒いの感情ではなくて、すべきだ、すべきでないという判断が最初から込みになっているような感情、つまり規範的な感情がこれから論じられます。ですから、ここに道徳感情の感情規則が形成され、これは道徳感情ですから社会の道徳的な絆にもなっていく。スミスの意図はここにあります。だからこれは社会において、社会秩序の形成ということに密接に絡む話になってくるわけです。社会秩序の形成を道徳感情の交換関係からみることが、『道徳感情論』のアダム・スミスのきわめて独特な方法になっているということです。

この社会秩序を彼自身は「自然的な自由と正義の体系」と呼んでいます。「自然的な」という意味は、理性の哲学に対比していることが一つと、それから神様の定めた道徳律、法律ではないこと。その両方の意味を込めて、これに対比して自分の方法は自然的な意味で自由と正義の体系を考えるという主張ですね。そのことが端的に表れているのが引用の

□と□で、□から出発して□を導きたいというのが、アダム・スミスのモチーフになっています。だからまず読んでみますけれども、これは冒頭の一句で、□「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに人間の本性の中には何か別の原理があり、これによって、人間は他人の運不運に関心を持ち、他人の幸福を、自分にとっても必要なものだと感じるのである」。まず、人間の本性が利己的なものであるという先ほどから何度も出てきた功利主義的な個人の見方が当然前提にされています。ところが、人間にはもう一つの本性があって、これが同感という本性、sympathy になるわけです。例としては、他人の運・不運に関心を持つ。他人の感情に関心をもつことが、自分自身にとっても必要だ、それが人間というものの本性なんだというところから出発します。本性という意味は「自然的な本性」という意味と同じです。人間の自然的な性質として、利己心と同感の二つをあげているということです。非常に独特なことだと思います。普通、功利主義的な考え方は、利己心だけから出発します。

利己心と同感から出発するわけですけれども、結論として次の引用□になります。□「社会は、幸福と快適さには劣るけれども、必然的に解体することはないだろう。社会はさまざまな人びとの間で、さまざまな商人の間でのように、その効用についての感覚から、相互の愛情または愛着が何もなくても存続しうる。そして、誰一人互いに何も責任感を感じないか、感謝で結ばれていないとしても、世話をある一致した評価にもとづいて損得勘定で交換することによって、社会は依然として維持されうるのである。」こういう結論にもって行きたい。この社会の性質が、先ほどの自然的な自由と正義という体系の内容になるということですね。

それから最後に、「世話をある一致した評価に基づいて損得勘定で交換する」と言っていますが、この「世話」はケアではないです。オフィスですね。事務局オフィスと同じ使い方です。世話を交換する。「世話」というのが一つのキーになっていると思いますね。世話を損得勘定で交換することによって社会が維持される。この間をつないでいく論理と実例が、『道徳感情論』の内容になっています。

それから、繰り返しますが、人間がお互いに感情行為を交換する場合の、関係の疎外がどのように起きるのか、ということをいつも頭に置いていてください。「売り子とお客」の感情交換関係の疎外と感情の本質論につながります。それから「セラピストとクライアント」に関しても同じことと私は思っています。

3）感情という経験

具体的な中身に入る前に、いくつか断っておいたほうがいいと思います。アダム・スミスは先ほどの引用□からはじめるときにいくつかのことを前提にしておりますので、それをあらかじめはっきりさせておいたほうがいいと思います。まず同感ということですね。

「他人の運･不運に関心を持つ」ということですけれども、同感をどう説明しているか、アダム・スミスの説明をまず見ておきます。

新書版の堂目さんの『アダム・スミス』の 29 ページを開けてください。図の 1－1。スミスの説明はこうです。ある感情の当事者がいます。これは他人です。この人がある対象にたいして、ある情況の中で道徳的な感情を発露しているとします。例えば、葬式で悲しんでいる、入学式で喜んでいる、というような感情を発露している他人を観察者としての私が見るわけですね。感情表現をしている他人との間に「運・不運に関心を持つという道徳的な本性」つまり同感が、この私の胸中に喚起されるということです。一種の感情移入論ですけれども、どうして同感が発生するか。相手の喜び、悲しみ自体は、私の方では経験することができない。これはもう痛い、痒いから、喜び悲しみまで、相手の感情を他人は知覚することができないわけですから、それが何であるかわからない。したがって相手の感情発現を私が観察して、そして相手が置かれた立場に自分を移してみる。これが「想像上の立場交換」と言われている手続きです。立場を相手に移してみて、この状況の中で私ならどのような感情を発現するかを想像している。葬式の場では当然悲しいという感情を抱くだろうと想像してみて、その想像上の自分の感情と相手の感情発露とが一致しているか一致していないかを観察する。この一致・不一致は、とりあえずは道徳的な判断抜きに、他人の感情表現がこの状況の下で場違いであるかないかの判断だけです。そのことをスミスは、相手の感情表現が「適切か不適切か」を私が判断すると言うわけです。でその上で、単に適切だけではなくて、それが道徳的に許されるものであれば、適切かつ「是認」されるべきだと言います。不適切ならば、私は相手の感情表現を「否認」するであろう。ですからこの是認・否認になるともう道徳的な判断が入っている。

私が、当事者である彼に同感するということは、私の立場からする相手に対する想像上の立場交換、相手の身になって、相手の置かれた状況に立って、自分ならどう感じるかを相手と比較する。という形で、同感する私と他者を設定して、そこから、この道徳感情論を始める。そういう記述の仕方をとっているということです。次の堂目 31 ページに行きますと、こんどは逆になって、私の方が当事者で、誰か他人が私の感情表現を観察しているという、自他の立場が逆転します。ここでも同じように、こんどは観察者としての他人の中で同感が起こる。

これは感情移入ということを考えるといかにも分かりやすい。常識的な感じがする。ただここから、先ほどの引用□のような社会の道徳的な絆が導かれるかどうかには、いろいろな問題が介在すると思いますけれど、とにかく、記述の出発点はこういうところです。ですから私と他人との二元的な関係からスタートして、最後は社会の道徳的な絆まで行くつもりなんですね。

もともと誰がこういう記述法を始めたのか系譜関係は知りませんけれども、アダム・スミスの頭の中に具体的にあったのは、これは明らかに商品交換ですね。共同体と共同体の

境界部分で、市場が生まれるわけですけれども、こちらの共同体から市場に出かけた人間と、向こうの共同体から市場に来た人が出会って、そこで商品の交換、この場合物々交換をする。商品交換から市場の成り立ちを説明していく。国富論の説明がこの方法をとりますけれども、こちらも同様だったのではないかと思います。

以上が、同感するという感情の経験についての、スミスの説明です。その際に注意しておきたいのはまず感情ということです。我々はなんとなく自分には心があって、心は感情を持っている。私には私の感情というものがあると思いがちなわけですね。ところが自分のことはともかくとして、先ほどのように他人の感情に自分が同感するとは何か。他人の感情は経験することができませんから、この場合の他人の感情とは明らかに感情表現、あるいは感情表出行為のことです。ある場合はこれはもう嬉しい、悲しいの言葉が伴った相手の身振りです。それに私が同感するかしないか、こういうことです。ですから、まずは感情というものは、ある感情というものがあってさわったりなでたり、交換したりできるというようなことではない。あくまで相手において私が知覚できる感情表現行為のことです。それを縮めて感情といっていると捉える必要があります。ただ、言葉まで含めて感情表現行為を考えますと、言葉にはすでに道徳的な判断や公共的な意味が付着しています。ここでは、自分の感情経験の意味を発見するというところから記述がスタートしていますので、喜びの感情とか怒りの感情とか便宜上使いますけれども、それはそのように見える感情表現のことだとまずは考えておいてもらわないといけない。これはとても大切なことで、感情労働を問題にする時に、感情が商品として管理されるようになると、その裏側に「本来の私の感情」があるはずだと見なして、本来の私の感情が本当の自己なのだと考える。そう考えたいというもっともな誘惑が起きます。しかし、他人の感情に私が接するときには、他人の感情表出行為を通じてしか、我々は相手の感情に同感することも、同感どころか知覚することもできない。アダム・スミスも明らかに最初からそう言っているわけです。だから感情のことをアダム・スミスは最初から「行為」と言い換えたりしています。

問題は自分の感情です。他人の感情はともかく、私は自分の感情に関しては、自分で知覚できます。しかし、自分は自分の感情の意味を本当に知っているのか。私の中には私の感情なるものが本当にあるのかどうか。自分が今悲しいとか嬉しいとか思っていると自分の感情の意味づけをする。自分の感情の意味は何かというときに、その意味を自分が自分だけで発見できることはまずありえない。起源的に考えても、もともと人は相手との関係の中で自分が今何を感じているかがわかるのです。基本的に感情というものは対他的なものだということです。感情を扱おうとすると、一人の人間から出発することがそもそも私の場合も相手の場合もできない。アダム・スミスでは初めからそうなっているんですね。これは労働力商品の交換の場面と非常に違うことだと思います。

もう一つあらかじめ注意しておきたいのは、アダム・スミスの先ほどの説明で、私と他人との出会いから記述を始めました。この私とか他者というのは誰のことなのかというこ

とです。もっとも分かりやすいのは対面の関係ですね。夫と妻の関係、いわゆる対幻想の関係、性的な関係、これも私と他者の二元的な関係になります。それから同じく対面の関係ですけれども、家族、友人、仲間における私と他者の関係ですね。それぞれ固有名詞を持っていており、あなたは誰である、Who are you の Who がはっきりしているようなそういう関係、我々は日々その中にいるわけです。この中から二人取り出すと私と他者の関係になります。

ところがアダム・スミス、あるいは私の話もそうですけれども、基本的にはそのような固有名詞をもつ関係ではなく、社会的な関係。相手がどこの誰かもわからない、私と他者との出会いというところから記述を始める。それが前提になっています。市場では、向こうの共同体から来た他者と、こちらの共同体からきた私とが出会う。そういう名前のない私と他者との出会いと、そこでの感情交換から記述をスタートしています。なんせ昔の人が書いた事ですから、スミスは厳密に限定してはいませんけど、そう受け取ります。ですからまずは、二人の関係から始めますけれども、この二人に関しては、匿名の二人であるということを前提にしながら読んでいくということですね。

余談ですけれども、いまは、脳画像というハイテクが発達していまして、私が怒っていると、大脳皮質のどこか特定のところの活動が活発になる。脳の局所的な活動と私が抱く感情との対応関係が、どんどん神経心理学の分野で明らかになっています。そうしますと、喜びという感情が脳のここら辺にあって、怒りという感情はあちらにあると区別ができる。もともと大脳生理学的にいって感情というものを持っているのであって、私と他者の感情交換というのは、相手の脳のこの部分と私の脳のこの部分の刺激と応答の関係だというふうに思いがちなんですね。最近の脳の研究者たちはすぐにこういうことに口を滑らします。これは実験場面を思い浮かべればすぐ分かることですけれども、喜びに相当するような刺激が与えられるわけですね。刺激の意味が外部からあらかじめ与えられていて、この刺激への反応部位を刺激の意味に結びつけます。刺激の弁別が最初から与えられていて、ここで言葉が使われてしまっている。もちろん絵で刺激を提示することはあるとは思いますけれども、その絵もポピュラーな意味が与えられている。

４）私と他者との感情交換

さて、私の理解する感情交換論に入ります。ここではまず、一人の他者に対する私の関係ですね。堂目さんの本でいうと、29 ページの図 1－1 です。この関係から見ていくことにします。この場合、アダム・スミスでは、他人の感情表現を私が観察して他人の感情行為が是認できるかどうかを判断する。私の説明ではスミスの関係を逆にします。一人の他者がいて、感情表現をしているのは私であると考えます。葬式に私が出席して、そこである感情表現を私自身が経験している。するとその横に、見知らぬ他人が一人いて、私の感

情表現に反応して何らかの感情表現を他人もする。他者のその感情表現を私が観察するというそういう場面を想定します。

感情としてアダム・スミス自身がよく例にするのは、典型的には喜びとその反対としての怒りです。喜びの例で言うと、私が喜んでいる。隣にいる他者もそれに反応して、ある行為を感情表現行為として返してくる。それからもう一つ、これはアダム・スミスが表立って取り上げていないけれども、感情の典型的な例としては欲望です。何々したい、したくない。売りたい、買いたい、ということです。私がマーケットに出て行って、自分のものを売りたいという身振り手振りの感情表現をしている。向こう側に私とは別の商品をもった他人が、なにやら私に答えて感情表現をしている。このような場面を設定するということです。なぜ、こんなふうにアダム・スミスの自他関係のベクトルを修正するかというと、このような最初の二人の関係の場合には、私は、自分が何を感じているか、自分の感情の意味を、私だけでは判断できないというところから出発したいからです。私は確かに私の心にある感情なり欲望が起こっているのを知覚できるし、それをこの状況のもとで表現しているとする。しかしまだ言語以前の段階ですから、怒りでも喜びでも言葉に出せないある衝動が私の中に起こってそれが感情行為として表にでる。これは何なんだろう。そのときに、これに対応する相手を観察して相手もまた私と同じような感情表出行為をしているならば、実はその相手の反応を鏡のようにして、ああ実は私はあれと同じ感情も持ったのだと、相手の感情行為のうちに自分の感情の意味を確認する。もしも相手がまったく別な感情表出行為をするとすれば、相手の感情において私の感情の意味が否定された。ああ、私は彼とは違った感情を抱いていると了解する。これは両極端です。私は私自身の感情の知覚はできるけれども意味は分からない。感情の当事者はスミスでは相手ですが、この場合は当事者主体を私に置きます。もっと分かりやすい例だと、欲望のことを取り上げればいいですね。私はこの商品を売りたい。しかし、私の売りたいという身振りにたいして、買い手の方から買いたいとレスポンスがあってはじめて、売りたいと買いたいという欲望の一致が得られるし、そうでなければ得られない。実は私の欲望が実現されてそれに値段がつく、つまり私の欲望に意味がつくということは、相手のレスポンスによってしかわからない。商品交換の例をあげると端的に理解できるわけですけれども、私は自分の欲望を実現するなり、知るなりできるのは相手次第というような関係です。この一方的な関係から考察を始めます。

アダム・スミスの場合でも、私と他人の立場が逆転するような記述はしょっちゅう出てきます。その一例が次の引用です。ここでは私と他者との、今説明した関係が非常にはっきり出ています。

「もし、人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種との何の交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、彼は彼自身の顔の美醜についてと同じく、彼自身の性格について、彼自身の感情と行動の適切性または欠陥について、彼自身の

精神の美醜について、考えることもできないだろう。」つまり、孤独に成長したのでは、自分のことについて考えることもできない。「これらすべては、彼が容易に見ることができず、自然に注視することがない対象なのである。そして、彼がこれらに眼を向けることができるようにする鏡も与えられていない。彼を社会のなかにつれてこよう。そうすれば彼はただちに、彼が前にもたなかった鏡を与えられる。」したがって他人の感情表現という鏡がなければ、私は自分の感情の意味を知ることができない。スミスの場合も多くの文章で同じ関係が書かれています。図 1－1 の私と他者との同感関係の説明とは違っています。どうして、図 1－1 の関係を逆転させるか、これについてはだんだんわかってくると思います。

アダム・スミスがここで引用した文章で言っていることも分かりやすいですけれども、実はもっと分かりやすいのは赤ん坊と母親の関係ですね。赤ん坊は生まれたときには自己だってないし感情の意味を分かってもいない。母親に感情表現らしいものをぶつけて、それに対する母親の応答を通じて、赤ん坊は自分の感情の意味と、感情の意味を通じて自分とは何かを知っていくわけですね。それと同じことが、言葉にまみれている大人になっても、原初的には起こっている。この場面を記述と理解の出発点として設定する。

さてそうしますと、以上と同じことは他者が私に対する関係でもいえる。アダム・スミスの図 1－2 です。今度は、感情の主体は他者であって、その意味の鏡になっているのが私だという関係です。子どもと母親ではありませんので、大人である私と他者の場合には、この私と他者の関係は、随意にひっくり返ることができるわけですね。今は私が主体であるけれども、次の場面ではこんどは彼が主体で私が相手である。商品交換、物々交換の場面をとればすぐわかるように、関係は容易に逆転できる。ですから、私と彼とのペアというのは、そういう意味では対称的にひっくり返るわけですね。その意味で自分の感情を他者との間で確認し合うということが自他共に起こったとすれば、それを今感情の交換、exchange と呼んでいいであろう思います。

アダム・スミスは必ずしもこのようには言ってないんですけれども、先ほどの図の 1－1 と 1－の 2 の二つのところで、原初的な自他の関係を以上のように解釈し直します。日本語でいれば、これは交感になりますね。交感とはアダム・スミスの同感という言葉に近しい。それから日本語で交歓という言葉がありますけれども、もしも私の感情表現が彼の感情行為において適切だという事が示され、かつそこで彼によって是認された、逆に彼と私の関係でもそれがわかるということになると、束の間、この一瞬に両者の間に同感の関係が交感できる。これを交歓というふうに日本語では言うわけですよね。歓びを交える。だから一瞬交歓が成り立つ。成り立たないことだって多いでしょうが、交歓が成り立つことを原理的に否定することはなにもないということです。

この場面で同感が成立した、つまり私の感情は適切なものであり、相手との関係で是認されたということが、厳密に成り立った場合、これを感情の等価交換と呼んでおこうと思

います。これはスミスの言葉ではありませんが。

他方、これの全く逆は相手が否認した場合で、感情交換そのものが成り立たない。もちろん実際には、両極の間に様々な濃淡を持った感情の交換関係がスペクトルのように展開していているはずです。これはおそらく商品交換と違いますね。商品交換の場合には売った買ったが成り立つか成り立たないかのいずれでしかない。人間の感情交換はもうちょっと強靭にできていて、いいかげんでいいということが成り立つんじゃないでしょうか。それが一つです。

それから、前に注意しましたけれども、この場合の感情は単なる痛い痒いの感情ではなく、道徳感情です。道徳感情では、是認された、つまり感情の等価交換が成り立つ場面では、私と彼との間に、束の間、規範的な関係が生じたことを、すでにこの段階で意味していることになります。これも商品交換とは違うことで、どこか記述の先の段階で道徳が登場するのではないということです。まあアダム・スミス的に言うと、同感という事が人間の自然本性ですから、そうである限り、同感関係の成立の可能性については文句のつけようがない。だからこの前提に乗っかって先に進みます。

もう一つ注意をしておきます。アダム・スミスはさらに、先ほどの二つの図にちなんで次のような説明をします。まず、最初の図 1－1 に関して、観察者私が、感情の当事者、彼の感情表現を観察して、彼の感情に同意できるなら、私はもともと同意したいという本性を持っているのだから、相手の感情が同意できて嬉しいと思う。私が嬉しいと思うと、今度は他人が観察して私が同意してくれた事を相手は喜ぶ。私と彼との間に、同感感情がそういう形で幾重にもいったり来たりする。文字通りの交歓がおこると、すでにこの段階でスミスはいっております。逆に、もしも、私が相手の感情を是認できなくて否認したとすれば、同感したいのに是認できなかったので、私は悲しいと思う。私が否認したことを見てこんどは相手が悲しいと思う、というような形で悲しみの感情も相手と私との間にいったり来たりするというようなことも述べています。しかし、私の話の今の段階では、関係はそこまで拡張することはできません。なぜなら、次のこと（レジュメの 4 番目）に関係します。この私と彼、あるいは彼と私の関係は、対称性と非対称性の二つがともないます。私と彼と、彼と私の関係が随時にひっくり返るんだったら、この関係は常に対称的だといえるわけですよね。なぜならば、ここで私といっても他人といっても、最初に前提にしたように、妻と夫の関係ではないわけです。名前のない二人の関係ですから、私は随時他者になりうる。この意味では関係は対称的である。従って、是認の関係があれば、同感、感情の等価交換がこの対称性を基礎にして両者の間に成り立つ。ところが、もっと重要なこととしてこの関係には非対称性、非対称な関係がついてまわります。最初の関係に帰って、私と他人との関係でみてみますと、私が自分の意味を相手の感情表出行動の中に発見することができたのは、相手が私に反応して、ある感情表現を返してくれたからに他ならない。相手のレスポンスがなければ私は自分の感情の意味を発見することができない。つまり相

手のレスポンスがなければ、私の感情交換がそもそも成り立たないわけです。感情交換が成り立たなければ、私の感情が是認されて他人の同感を得るということ自身が、つまり同感の関係自身が成り立たないわけですね。つまり、この関係がそもそも成立するかどうかの生殺与奪の権というのは私ではなくて他人が握っているわけです。私が自分の感情の意味を発見できるかどうかは他人次第ということです。

実際、関係は匿名の関係ですから、他人は絶えず私を裏切ることができる。つまり私の感情を否認する、完全には是認しないということがしょっちゅう起こるわけです。すると、両者の関係は直ちにその場で挫折してしまいます。このことは他人と私の関係をひっくり返してみても、こんどは私が他人の生殺与奪の権を握る。先ほどのアダム・スミスのところで、鏡という言葉がでてきましたけれども、この二人の間の関係では、当事者の感情の鏡を他人が握るわけです。鏡である方が、絶対的にこの関係の鍵を握っています。鏡に映す人と鏡との非対称性がついてまわるという非常に重要なこと、のちのち問題になるようなことが、ここですでに起こりうることになります。

売りたい買いたいの関係を見れば明白ですね。私の商品が売れるかどうか、いくらで売れるかどうかは相手次第であって、相手は私の欲望を裏切って商品の交換関係はその場で挫折してしまう。感情交換もこれと同じで、これを関係の非対称性と言っておくとします。

でそうするとレジュメの 5 番目です。実は関係の非対称性が、関係の疎外を起こして固定するということがさまざまの具体的場面で観察できるのではないかと思います。関係における特権的他者として相手が成立するというふうに。すると鏡というのは従うべき鑑となる。幼児と母親の関係というのはまさにそうです。母親が、この場合の私、子どもに対して鑑として、私の感情表現、自己実現の生殺与奪の権を握るわけですね。幼児の場合にはこの非対称な感情交換の関係が幼児期の間持続する。感情の等価交換が両者の間で成立するかどうかは、母親次第ということが続いていく。こんな関係が一生続いたらひどい事になります。ということで、子供は親ばなれをするわけですね。

同じことがクライアントとセラピストとの関係でも観察できる。ことにアメリカ社会では、セラピーの関係は主としてカウンセリングの関係です。身体障害のリハビリじゃないと考えてください。カウンセリングでは時間決めで、私はセラピストに対して自分のことを話すわけです。自分のことを話しながら、相手、セラピストをまさしく鏡として、その鏡に映る自分を見ながら自分の感情行為を調節していく練習をして、次の日にはまた職場に帰っていく。これはアメリカでは社会現象だといいます。ここでも明瞭に関係の非対称性が、専門家との関係で固定している。同じことは医療関係でも、学校でも、さらにサービス産業でのお客との関係でも生じます。

ところが理念的な市場社会では、このような非対称の関係が固定することはない。私と他者の関係は絶えず挫折し、むしろ挫折を繰り返すことの中から「自然的に」社会関係が成立、つまり析出（晶出）する。このような関係に投入されるということが、実は、二人

の間の感情交換関係が閉鎖的なものにならずに、社会感情へと感情関係を開いていく原動力になっていきます。

従って、以上を総括していいますと、まずこの私と一人の他者との二元的な関係自身は固定する事はありえない。私と彼の関係がひっくり返るだけではなくて、私と彼との関係は絶えず挫折してその場限りのものになる。そういう不安定性をこの関係自体が抱えもっている。そのようにプリミティブな関係から、話が始まっていくということですね。アダム・スミスの堂目さんによる要約を見ると、必ずしもこうは書いてないです。むしろこの二人の関係が固定して、その上にさらなる概念が積みあがっていく形に描かれていますけれども、これとは別に見たほうがいいと思います。

５）私と他者たち

次に、「私と他者たち」の関係です。こんどは、私に対して感情交換をする相手、他者が不特定多数でたくさんいる。このように人間関係を拡張してみることができるわけです。これも社会的にはいくらでも起こることです。家族の中でも起こることでしょう。けれどもここでは匿名の他者 A、B、C と、私が個々に出会って相手との間に、先ほどと同じような私と他者の二元的関係を結ぶという場面を想定してみます。私と他者たちとの拡張された二元的な関係ということになります。商品交換で言えば、商品交換する相手が多数みつかる場面だと思っていただければいいと思います。

こうなりますと、個々の他者 A、B、C、・・との私の関係において、先ほど来の二元関係の性質が全部当てはまります。しかもここでは、他者はＡに固定しないわけですから、私の鏡としての他者という特権的な他者の位置も絶えず入れ替わるという形で、関係の非対称性が崩れることが、拡張された関係でも必然的に起こります。ということは、私と他者との関係が他者たちにまで拡張されたとしても、この集団の中で起こるのは、私と他者との間の感情交換の束の間の成立と不成立が、他者たちとの間で飛び跳ねているような、そういう社会状態だということです。

この場合、私とは誰でもいいわけですから、次は他者 A が、私の位置にあってその他の者との間に一瞬の感情交換関係をもちます。実はこれが、感情交換の場面で、「自然状態」と古来政治思想で言われてきた状態に相当すると考えていいと思います。他者がたくさん、人間がたくさんいるわけですけれども、最初に出発点にしましたように、この他者たちは名前のないただ利己心と同感したいという本性だけを持っている人たちですから、同感ができなければこのペアは直ちに解体して、別の同感関係を求めるということで、完全に人間関係のアナーキーがこの社会状態では支配しているということですね。ただ、私の周りに A、B、C という感情交換の輪ができるということは、束の間想定することができる。感情交換の震央（地震の震源地）としての私が存在できる。あるいは、池にバラバラと石を

投げ込んだとき、いくつもの中心を持ちながら波紋が重なり合うような形です。多数の私がいてその周りに感情交換する多数の人間が、その都度成立して重なり合っている、そういうカオスを想定することができるわけですね。

しかし、このような多数の他者たちとの関係を経験することを通じて、私は次のような事を発見する。つまりこの世の中、不等価交換というのはしょっちゅう、あちこちで起こることなんだという、そういう発見をするわけです。これが例えば赤ん坊と母親の関係と基本的に違うことです。赤ん坊と母親の関係は、子どもから言えば、基本的には同感、等価交換の関係を求めてそれに母親が対応してくれる。幼児が物心つくまでは、相手から不等価交換のしっぺ返しはなかなか受けないということです。しかし社会に出れば、多数の匿名の他者たちとの感情交換の中で、次のようなことが起こる。ここでアダム・スミスの引用になります。

「この世に生まれ出ると、他人を喜ばせたいという自然的欲求から、交際するすべての人にとって、どんなふるまいが快適であるかを考慮するように自分を習慣づける。あらゆる人の好意と明確な是認とを得るという不可能で道理に合わないもくろみを追及する。しかしながら、まもなく経験によって、この明確な是認が普遍的にはまったく獲得できないものであることを知る。一人の人を喜ばせることによって、ほとんど間違いなく別の人を怒らせることを知る。」

まあこれも常識的なことです。ここに書いてあるように、それでも同感を求めて他者 A、他者 B、他者 C と私は付き合うわけですね。そうすると、私の感情表出行為の明確な是認を得られない事はしょっちゅう起こるんですけれども、だからといって商品交換が可能なように、感情の等価交換が可能な他人を発見できないというべき理由もない。私と他者 A、B、C との関係で束の間、私に明確な是認と好意を与えてくれる他者たちの輪を発見する事ができない絶対的理由もないわけです。

だから言い換えると、この段階で私の等価交換の仲間が、一瞬だけしかも私からみてだけこのことですけれども、成立した。その意味で私を震央とする感情交換の仲間が一瞬の間だけ成立することを否定するわけにはいかない。この仲間という輪が成立したという事は、反面で、同感できない他人をここから排除したことも同時に意味するわけですね。感情の等価交換に失敗した他者たちが私のまわりにたくさんいて、彼らは彼らで別の集団を作っている。市場で欲望の交換をすることを想起するまでもなく、私と彼との二元的関係の第二段階として、この拡張された二元関係を想定することができます。

すると、これも非常に大切な事だと思いますが、他人の同感を得たいという本性に基づいて私は他人 A、B、C と出会うわけですが、この過程で、自分の感情が多数の他人という鏡の間で同感が得られるように、私は感情の自己調整を行わねばならない。自分の商品の値段を値切るんですよ。相手に合わせて、そういうことが起こる。あるいは、値段をふっかける。これは同感を得たい、A の同感も B の同感も得たいというときに起こってくる自

己調整です。私と同感の関係を結んだ他者 A、B、C もそれぞれ同じことをやるわけです（私も他者たちも互いに交換可能な匿名者であることに注意）。A と B と C はそれぞれがべつの個人なのに、それぞれの感情が自己調整されて、全体として感情の淘汰が起こるわけです。でたらめで自分勝手な感情は抑制され、表現不足の感情は引き伸ばされる、といったことが私自身にも起こるし、他者たちにも起こる。これをいま感情の自己調整と淘汰と言っておくことにします。

これもアダム・スミスに悪乗りしていうのですが、なんせ人は他人の同感を得たいわけですよ。そうすると先ほどの引用にあったように、自分勝手をやっていると、一人を喜ばせてもほとんど間違いなく別の人を怒らせる。こういうことを経験しますと、どんな振る舞いが快適であるかを考慮するように自分を習慣づけると、スミスが先に書いていました。学習するのです。これは必ずしも遠慮して自分の感情を切り詰めるだけではないですよ。逆に相手に合わせるために自分の感情を誇大に表現すること、両方とも含まれている。こうして、感情が完全に対他人との間で調整される。対他存在としての感情が形成されていきます。

ところがですね、繰り返し念を押しておきます。私と他者の関係が私と他者たち多数に拡張されたとしても、この各々は私と他者との二元的な関係をそのまま拡張しただけですから、この関係がもっていた不安定性を拡張された関係も全部もってるわけです。ですから、束の間成立した私の感情交換の輪は、次の瞬間にただちに崩れてしまう。先ほど自然状態のアナーキーといったわけですね。ですから、仲間や社会の道徳的な絆が成立するとは、この段階ではまだいえない。

６）他者たちと私　関係の根本的な変容

次に入ります。私の他者たち多数にたいする関係を、想像の上で、ひっくり返してみます。そうすると、今までとは全然違ったことがここで生じてくることがわかります。感情交換関係はここに根本的な変容を遂げます。今度は多数の他者 A、B、C のそれぞれが、私を鏡としてそれぞれの感情の意味を発見し確認する。あるいは他者たち A、B、C がそれぞれ私を鏡にして、どんな振る舞いが快適であるかを自己調整します。どんな振る舞いが快適であるかを考慮するように、A も B も C も、自分を習慣づけようとするわけです。そのような逆の関係ですね。こんどは鏡は私一人です。したがってこの関係が成立するもしないも、私だけがその生殺与奪の権を持っていますから、束の間特権的な位置に私が立ったと想像してみてください。

特権的な鏡あるいは鑑、別な言い方をするとすでに道徳的規範としての私の位置が、こういう形で成立します。これが他人一人と私の関係だったならば、これは束の間の関係ですから、私はすぐに別の他人を選ぶことができました。ところが既に第 5 節で、人びとは

多数の他者との間で、是認されるように学習し自己の振る舞い方を習慣づけてきているわけです。そのような他者たちがいまや私を鏡と見立てています。こうなりますと、私と彼との二元的関係を私が裏切って逃げちゃえばいい、というようなことと違ったことが起こります。私の振舞い方を媒介にした、他者たちの相互関係が成立するようになります。つまり他者 A、B、C は、もはや個々に私の鏡に自分の感情を映して交換をしているのではなくて、私の鏡に映ったものを、こんどは逆に A と B、C の相互に交換することによって、私の鏡に映したものを通じて相互的な感情の交換関係が他者たちの間に成立するようになる。これが根本的にいままでの関係と違うところです。

関係の変容は直ちに私の位置と性格にも生じます。他者たちの鏡としての私も、もともと匿名の私ですから、勝手に利己的に振舞うことができる身体存在として、一人の身柄存在にすぎないのでした。鏡でも道徳的規範でもなんでもない、ただの私自身なんですけれども、いまやこれが、多数の他者たちの道徳的な鑑に類する位置に立つことになります。このことによって、身柄と道徳的な鑑とに二重化された存在として私は立たされることになります。別に難しいことではありません。例えば教室では、教師としての私に生徒の目が全部向かってきます。私は教師という役割存在であるしかないのですが、私自身はこの役割をはみ出る身柄として独自の存在でもあるのです（「先生も人間だ」）。しかも私という役割が他者たちの相互性を媒介するとなりますと、私の感情規則がすでに私というものから超え出て、私という固有性を超え出て、この仲間の間にいきわたっていくような何かになっていくということですね。これはもう一時的な感情でもありえない。まだ言葉はないわけですから、何となくこうすべきであるとか、こうすべきでないとかいうような、この仲間の特徴的な一般的な観念といいますか感情といいますか、そういうものが、私が本当は誰であるかに無関係に、私の身柄から抜け出て他者たちにいきわたっていく。そういうことですね。

ここに、私を鑑とした私的な感情規則のプリミティブな成立を見ることができます。私の感情表現のやり方をいわば基準にして、他者 A、B、C は自分の感情表現を評価する。評価することを通じて相互に感情を調整しあう。それは私自身にも起こります。この集団の中で、私を震源地とした私的な感情規則が浮上するという段階です。ある場合にはこれは明確に言葉として言われるであろうし、言葉になれば、これはもう感情交換の通貨、貨幣ですね。それが、集団と仲間内を行き来する段階を想像することができます。

いうまでもなく、以上は資本論でマルクスが貨幣の成立の論理として使ったことを、感情交換に当てはめたものです。他者たち多数の私にたいする商品交換の関係から、一般的等価形態として貨幣が生まれるとマルクスは書いたのです。同じ論理がアダム・スミスの道徳感情論のテキストにも読み取れると私は思います。ちょっと逸脱して貨幣のことになりますが、私が持っているある商品を他者 A は自分の商品、他者 B は自分の商品それぞれと交換したいわけですね、市場で。そうするともう面倒ですよね。それで、この私の立場

に貨幣が置かれますと、もう私とは関係ない。私が持っている商品の貨幣価値を基準にして、A の商品はいくら、B の商品はいくらと比較できます。だったら、A と B が交換する場合の価格の比較もできます。他者 A、B、C の間に、私の商品の貨幣価値を基準にして、それぞれの媒介的な交換関係の判断が成り立つ。

スミスのいう「道徳の一般的諸規則」の成立を理解するのに、以上が分かりやすい論理ではないかと私は思います。例えばですね、家族はもともとどういうふうに成り立っているのかを想像するといいです。他者 A、B、C は家族の場合は子どもたちで、私が父親だとします。家族の絆というのは、子どもたち全部が私のほうを見て、私の振る舞いを見ならって相互の感情を交換する。そのやり方が、いわば家風です。それから、ここではプリミティブな意味で、初めて会った者どうしの仲間の成立を見ることもできると思います。介護施設では多くの場合、職場の共同性をあたかも初めてのように形成しなければならない。同じ職場で、職員の間にどのような共同性が成立するかを試行錯誤していきます。この過程を反省する論理としても参考になると思います。

そうしますと、この段階で初めて、商品交換から貨幣が疎外されて析出するように、人間関係の疎外という概念が出てきます。なぜなら、ここで私的な感情規則が私から析出するものですから、私自身がこの基準に合わせて、私の感情を同調したり、切り詰めたり、肥大化したりということが起こり、また、他者たちに関しても、同様なことが起こる。こうしていわゆる学習と経験によって、感情交換関係の淘汰が起こります。つまり、同感という等価交換を求め、等価交換が成立しない不等価交換の仲間を排除していくという、感情調整が起こります。もしかしたら私自身の生身の感情から言えば、仲間内で成立した感情規則は一種の疎外ではないか、と感じるようにもなる。その契機がここに生まれるわけです。

以上のようにして、私の仲間といえる集団が成立するわけですけれども、言うまでもありません。これはたまたま私の振る舞いに他者 A、B、C が同感関係を求めたことによって成立したことです。次の瞬間には、私の位置に別の誰かが立っている。次の瞬間には別の誰かがというふうにして、この関係は市場ではとりわけ、たえず組み替えられる。個人のカオスに代えて、集団のアナーキーが残るわけです。たとえ一瞬仲間があったとしても、これが固定し永続するかどうかわからない。家族とか特定の仲間集団として、固有の名前が付くかどうかもわからないわけですね。わからないけれども、とにかくこの社会の中でこのような仲間が複数成立したと想定する段階に達したのです。これをアダム・スミスは世間と呼びました。World ですね。これはアダム・スミスの言葉です。従って、いまこの段階で一瞬ですけども、世間というものが【私の仲間、他の仲間 A、他の仲間 B、・・・】という集合として出現します。一時的な感情規則を共有しながら多数の集団が成立しており、それらがランダムに寄り集まっているものとして、世間がプリミティブに成り立つ。まだ社会とはいえない。集団の核みたいなものがいくつかできた、というところに到達し

ました。

　さて以上のように、私はアダム・スミスの記述を追うことができると思います。スミスは二人の関係から始めて、だんだん関係を拡張し、その中で集団の道徳規則が抽出される過程をかなり意識的に追っているんですね。私が別に捏造したわけではありません。その意味で、次の引用を、今日の最後に読んでおきます。

「最小の同感と寛大さしか世間から期待できない。それでも、孤独の暗黒の中で嘆いたり、親しい友人たちの寛大な同感だけを頼りにしてはならない。できるだけ早く、世間と社会の日光のなかに戻らなければならない。私の悲運あるいは幸運について何も知らず気にもかけていない見知らぬ人びと共に暮さねばならない。敵との同席ですら避けてはいけない。」

以下続く